

人間学ということばから何をイメージされるだろうか。一般的には、人はいかに生きるべきかという指針や人格の修養、あるいは社会人として役立つような処世訓を学ぶこと、というあたりだろうか。哲学に関心がある人であれば、人間の本質に関する探求や思索などといったことを思い浮かべるかもしれない。

本シリーズのタイトルとして掲げた人間学は、まったくそうした意味と関係がないわけではないが、少し違っている。人間とは何かという有史以来の問いを根本から考え直して、時代に必要とされているような人間観を編み出すことを目指す学問的試みを意味することはとして使っている。

たとえば、近年の生物進化の研究では、動物と人間を区別する根本的な条件と考えられてきた感情や知性などの領域にまで踏み込んで、そうした人間の精神活動までもが生物進化の論理と関連していることをあきらかにしている。アンドロイドに関する工学的研究は機械を人間にいつそう近づけることを可能にし、生物工学がクローン生物を実現させることで、かつてであればSF的な夢物語であったことがなれば現実となりつつある。

このように、人間らしさの輪郭が曖昧となり、アンドロイドやクローン生物が人間とともに暮らすような世界もそう遠くなくなつたいま、人間とは、あるいは人間性とは何を意味しているのかという疑問は、人びとの生活にとっても身近なものになりつつある。

人間学

Anthropology

丹羽 典生 にわ のりお 民博 民族文化研究部

明日から使える!

人間学の キーワード

今日「Anthropology」は人間学と人類学というふたつの訳語

がある。哲学においては、人間性の本質を探究する学問としての人間学と訳される。一方で、人間に関する総合的の科学としては、人類学と訳される。総合的というのは、たとえばアメリカにおける人類学では、いまでも形質、文化、言語、考古学の四つの下位分野を含んだ学問とされているように、生物学的特性から文化としての人間までを対象としているためである。しかし、人間学と人類学の両者は「いずれも、Anthropology」の原義の「人間に関する探求」という意味で、根は同じものである。

新しいテクノロジーが生まれ、学問の在り方も変化したいまの時点で、「人間とは何か」という根本的な疑問に取り組むには、これまでの人類学の学問的あり方にとどまっただけでは十分でないかもしれない。たとえば、哲学、倫理学、経済学、心理学から生物学、物理学までに至るそれぞれの学問の先端的な領域で、お互いの知恵を出し合い、ともに考えることでようやく答えに近づけるのであろう。その意味で、人間学とは、人類学の本来の意味に立ち返る、学際的で、野心的な試みとなる。

人類学はもとより、人文社会科学などの学問の危機が語られるようになってから久しいが、さまざまな領域のそこかしこで先端的な思索や実験が重ねられ、あらたな知識や斬新な視点^{ざんしん}をわたしたちに与えてくれるような学問上の成果が、生み出されつつもまた事実なのである。「人間学のキーワード」を通じて、新しい学問のかたちとその面白さをより身近に感じてもらいたい。

